

〈国語〉

## ことばを磨き伝え合う力を育む授業づくり

——「相手意識・目的意識」を持たせる授業の工夫とICTの効果的な活用を通して  
(第5学年)——

那覇市立若狭小学校教諭 神谷未来

### I テーマ設定の理由

現代社会は、グローバル化の進展や技術革新などにより急速に変化し、予測が困難な時代となると考えられている。このような時代を生きる子供達には、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働しながら課題を解決し、新たな価値を創造する力など、これからの人生を主体的に切り拓く力を身に付けることが求められている。また、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』(以下『解説国語編』)の目標の中に、「(2)日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。」と示されており、児童の将来のために、国語科の担う役割は大きいと考える。

令和3年度の全国学力・学習状況調査から、本校の課題として「複数の本や文章を読み、内容を的確に押さえながら自分の考えを明確にすること」などがあげられた。また、本学級の児童は、自分の考えを明確にする場面において、「なぜそう思うの?」と聞くと、「なんとなく」と答え、「どう思う?」と聞くと、「普通」と答える児童がいることに気づいた。その要因として、目的や意図に応じて理由を明確にししながら、自分の考えを相手に伝える必要性を十分に感じていないことや、自分の考えは持っているが、自分の考えを分かりやすく伝えるための語彙力が十分に身に付いていないことが理由ではないかと考えた。

これまでの実践を振り返ると、「話すこと・聞くこと」の指導において、「必要感をもたせて」「聞き手に応じて」「目的に応じて」話すことの細やかな指導が十分ではなかった。その結果、児童が相手意識や目的意識を持ち、必要な文章や情報をそろえたり、関係づけたりすることが十分でないまま話すことがあった。また、「話すこと・聞くこと」の活動において、自分の話を聞いてもらい、いいところを伝え合い、認めてもらえたと自己存在感の高まりは見られたものの、本当に自分の考えが相手に伝わっていたか、適切なことばを使っていたかなどの振り返りの方法に課題があった。

そこで、本研究では「ことばを磨き伝え合う力の育成」に向けて、国語科の「話すこと・聞くこと」の学習過程において、特に、「よりよいことばを使って伝え合う」ことを意識した授業改善を目指す。自分の考えを持ち伝えるために、深い思考力や的確な判断力、豊かな表現力を育む基盤となる語彙力を身に着けることをベースに置き、「相手意識」「目的意識」を明らかにし、そのために必要な情報を収集し比較・分類・関係づける「視点」を持たせる指導の工夫を行う。さらに具体的に表現できるための手立てとして、「話すこと・聞くこと」の活動の場において、ICTの良さを効果的に活用する。例えば、話し合いをしている児童の様子を動画に撮ったり、記録したりする。また、プレゼンテーションなどをさせる際に、よりよいことばを使って作り直しをさせる。そして、その動画を何度も見返したり、児童同士で共有しアドバイスしたりする中で、よりよい言語活動に作り直しをさせ、振り返りや評価にも生かしていく。その他、語彙力を豊かにするために、普段の日常生活の中で素敵だと思ったことなどを、ことばや写真で捉えさせながら、ことば集めをさせていく。以上のことから、「相手意識」「目的意識」を明らかにし、ICTを効果的に活用することを通して、自分の考えを相手に伝えるために、よりよいことばを使って伝え合う力が養われるのではないかと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

国語科の「話すこと・聞くこと」において、「相手意識」「目的意識」を明らかにし、ICTを効果的に活用することによって、自分の考えを明確にし、ことばの持つよさに気づき「ことばを磨き伝え

合う」ことのできる児童を育てることができるであろう。

## II 研究内容

### 1 「ことばを磨く」ことについて

#### (1) 「ことばを磨く」とは

ことばを磨くとは、阿部藤子（2020）によると「語彙を増やし学習や生活の実際の中で正確かつその場に応じて適切に使えるようになること、そして、ことばそのものについて認識を深めながら自分らしいことばで表現しようとする使い手を目指すことといえる。」と示している。また、学習者の学ぶ姿として、阿部は、「①ことばに興味をもち、ことばを増やそうとする姿②自分の伝えたいことを明確に表現することばをもち、相手や場、状況、文脈に応じて適切にことばを使う姿③自分ならではのことばを問い直そうとする姿」の3つを示している。

本研究では、ことばを磨く児童の姿をより具体的に見取るために、上記の阿部の示す学習者の学ぶ姿を参考に、表1のように設定した。そして、自分の考えを相手に伝える場面において、自分の知っていることばの中からその時の感情や考えにぴったりなことばを選ぶことができたか、また、自分の考えを分かりやすく伝えるための語彙を楽しみながら増やすことができたかなど、表1を基に見取っていく。

表1 本研究におけることばを磨く児童の姿

①自分の生活環境や学習環境において身に付けたことばに関心を持ち、身に付けたことばを楽しみながら使って増やそうとする姿
②自分の知っている意味の似たようなことばの中から、その時の感情や考えにぴったりなことばを選び、相手に伝わりやすい表現をしようとする姿
③自分のことばを友達の考えやことばと比較し、その中でも自分の考えに適切なことばを問い直す姿

#### (2) ことばを磨くために

ことばを磨くためには、語彙を増やす必要がある。しかし、語彙をただ増やすだけではなく、ことばを磨くために語彙力を高めていくには、今村久二（2017）が捉えている4つの語彙力（知識力、語彙量、言語感覚、言語操作能力）すべてを網羅させて磨いていかなければならないと考える（図1）。その中でも、児童のことばを磨くために、①と②はそれぞれのことばの意味や内容について知識を持ち、理解したり使ったりするために多数のことばを持っていなければならない。③と④に関しては、ことばのよさに気づき、適切に使えるか自分で判断しないといけない思考力が必要になってくる。

言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめでは、「考えを形成し深める力を身に付ける上で、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにする必要があることが指摘されている。」と明記されている。思考力を高めていくためには、語彙力が必要になり、相互の関係は支え合う関係だといえる（図2）。思考はことばによって考えられ、ことばは思考によってよりよいものになっていく。このことから、ことばを磨くためには、語彙の質と量を充実させ、思考力を高める工夫が必要になってくると考える。

#### (3) 語彙力を高める指導について

今村は、「語彙学習は、言葉に出会い、言葉に関心を持ち、その楽しさや豊かさに気づき、より深く理解したり使ったりすることに意欲的に自ら言葉の世界を探求する学びである。」と述べているように、語彙力を豊かにするには、多様な言語活動を通して、語彙の質や量を高める工夫が必要ではないかと考える。

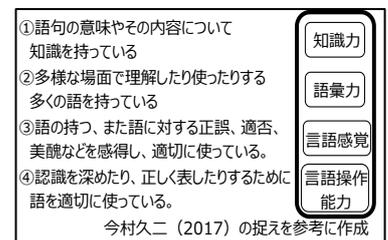


図1 語彙力の捉え方

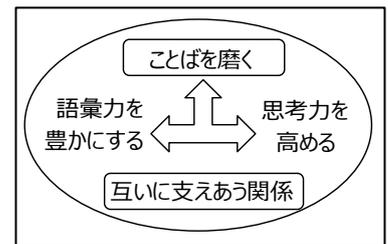


図2 ことばを磨くことと語彙力と思考力の関係

そのためには、語彙学習において、児童の実態に合った語彙単元の開発が必要になる。短期間の語彙学習ではなく、「話すこと・聞くこと」の領域の単元につながる「ことば集め」の活動や子供たちの中から、「使ってみたいことばができた。」「ことばを意識すると、伝えたいことが分かりやすくなる。」などのよりよいことばを実感させる活動を通して、ことばは人と人との心をつなげる大切なもの、人の心を動かすものだとして改めて意識させるように、計画的な語彙学習を取り入れていく必要がある。

## 2 「伝え合う力を育む」ために

### (1) 伝え合う力とは

『解説国語編』では、「伝え合う力を高めるとは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである」と示されている。また、国語教育指導用語辞典（第5版）では、伝え合う力のことを「一方向的な表現→理解ととらえられがちであった『伝達』という用語に対して、発信・受信という双方向の言語活動を強調して新しく使われるようになった。場面・相手・目的・効果を意識した言語活動力を育てようとする。」と示されている。このように、伝え合う力を育むためには、単に伝達だけではなく、言語を通した双方向のやりとりを大切にすることが重要である。

以上のことから、本研究における「伝え合う力」とは、自分の考えを伝えるだけでなく、相手の考えを受け止めて理解し、意見や感想を述べたりするなどの言語活動を通して培われていく能力であると捉え、研究を進める。

### (2) 伝え合う力を育むためには

伝え合う力を育むためには、伝え合う言語活動を、人間と人間との関係の中でお互いを尊重し合いながら行い、複数の主体同士で、音声または文字によって自分の考えを発信・受信しあうことが必要である。相手に伝えたい、相手に分かってもらいたい、知りたいという相手意識や目的意識を明確にすることで、伝え合う力が育まれると考える。このことから、ことばを磨き伝え合う力の育成には、伝え合うために、相手意識・目的意識を明確にすることがとても重要になってくることが分かる。学校において、授業の中で話し合う、助言し合う、発表し合うなど伝え合う場面を意図的に設定するといった指導過程を工夫することで、児童が友だちの考えを受け入れ、自分の考えをより深めることができるだろうと考える。

## 3 相手意識・目的意識を持つための工夫

話すためには、相手がいないと話すことができない。聞くためにも相手がいないと聞くことができない。また、話したり聞いたりする相手や目的がなければ深く思考するという行為は生まれてこないのではないかと。棚原貴史（2021）によると、『『話す・聞く』という表現行為は、信頼を基底とした深い協同性に支えられて成り立つといえる。それは、ことばが相手を大切に思い相手の心をつなげる合おうとする愛着の関係の下に生まれたものだから。』と示されている。

「話す・聞く」の学習活動において、児童はお互いに認め合い、関わろうとする態度を大切に、話し手は話の内容が明確になるように構成を考え、聞き手は話し手が伝えたいことは何か、自分が聞く必要があることなのかと意識しながら聞き、感想や考えを形成する必要がある。

本研究の「ことばを磨き伝え合う」ことを意識した授業改善では、「相手意識・目的意識」を明確にするために、次のような工夫を行う。具体的には、「話すこと・聞くこと」の領域において、「100年後も伝えたい沖縄の言葉をプレゼンテーションしよう」を単元のゴールとし、地域の老年寄りや保護者に伝えるという相手意識を持たせる。また、導入時にゲストティーチャーを招聘し、沖縄の言葉についての現状と想いを話してもらい、そこで、子供たちに沖縄の言葉の現状と課題について気づかせ、課題意識を持たせる。誰に対し（相手意識）、何のために（目的意識）、自分の考えを提案するのかを意識させ、相手に分かりやすく伝えるためには、どの方法を使えばいいのか、教師の自作のモデル文やデジタル教科書の参考動画を見て、プレゼンテーションのイメージをつかませる学習活動を行っていく。

そこで、本研究では、「話すこと・聞くこと」を中心にした指導において、話したい内容を相手に伝えるためにはどの情報を収集するのかを考えさせ、比較・分類・関係づける「話す視点」を持たせる指導の工夫を行う。また、相手が伝えたいことは何か、相手の考えを理解するためにはどのような質問が適切かを考えるなどの「聞く視点」を持たせる。そして、相手の話を聞き、自分の考えを形成していくことにつなげる授業の工夫を行っていく。

#### 4 ICTの効果的な活用方法

樋口万太郎(2021)は、ICTを活用することで、子供側が感じる良さとして図3のように示している。また、ICTを活用した上で、授業を進めていくにはステップがあるとも示し、①教師が教具として活用している段階(教師が授業動画を見せたり、問題を提示したり、デジタル教科書を使用している。)②子供たちが文具として活用している段階(ノートのように、一人で自分の思考を可視化していたりしている。)③学びを個別化・協働していく段階(クラウドを活用して課題に取り組んでいる。)の3つである。

**タブレットを使用した授業のよさ**

- ①場所・時間を問わず取り組める
- ②情報を送り合うことができる
- ③自分が必要なデータを蓄積できる
- ④自分の考え・動きを可視化できる
- ⑤友達の考えをすぐ知るることができる
- ⑥子供自身で考えを比較することができる
- ⑦子供たち自身で考えて整理・分析・構造化できるように学びを自分の力で深めることができる

図3 ICTを使用した授業のよさ (樋口万太郎参考)

本研究では、3つのステップを効果的な場面で活用することを意識し考え、授業を組み立てていく。例えば、デジタルホワイトボードアプリ「Jamboard」の付箋紙機能を活用し、ことば集めをして見つけたことばを増やしていく活動をする。また、ICTでスピーチを記録し、それを発表者と参観者で見た場合、その動画を見ながら、「ここでこう話したほうが分かりやすい。」「資料をもっと大きくしたほうがいいんじゃない。」といった事実を基にした振り返りとアドバイスを行う。タブレットを使うことでスピーチをよりよいものにすることができ、事実を基にスピーチの改善点を考えるという思考力を育成できると考える。このように今までできなかったスピーチを客観的に見ることがICTでできるようになってきている。ICTの良さを生かしながら、児童にも教師にも効果的に活用できる方法を考えながら、児童の思考力、判断力、表現力などを育成していきたいと考える。

### III 授業の実際

#### 1 単元名 「100年後も伝えたい 沖縄の言葉」

教材名 「提案しよう、言葉とわたしたち」(光村図書5年)

#### 2 単元目標

- (1) 言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くことができる。 【知識及び技能(1)ア】
- (2) 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすることができる。 【知識及び技能(1)オ】
- (3) 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えることができる。 【思考力, 判断力, 表現力等A(1)イ】
- (4) 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができる。 【思考力, 判断力, 表現力等A(1)ウ】
- (5) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。 【学びに向かう力, 人間性等】

#### 3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付いている。【(1)ア】 ② 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている。【(1)オ】	① 「話すこと・聞くこと」において、話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えている。【A(1)イ】 ② 「話すこと・聞くこと」において、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫している。【A(1)ウ】	① 粘り強く話の構成を考え、学習の見通しをもって、提案している。

4 単元の指導と評価計画（全7時間）

学習前次	時	学習目標	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
学習前次		「方言と共通語」の学習をした後、タブレットを使用し、心に響いたことば（沖縄の言葉、共通語）を本単元に入る前に集めて、タブレットに蓄積しておく。			
第1次	1	<p>○ゲスから「100年」の課題を課す。</p> <p>○ゲスから「100年」の課題を課す。</p> 	<p>① ゲスの話を聞く。</p> <p>② ゲスの話を聞きながら、自分の考えを伝える。</p>	<p>○ 連続的に話す。</p> <p>① 連続的に話す。</p> <p>② 連続的に話す。</p>	<p>【知②】沖縄の言葉に興味を持ち、発言できること（目指す姿①）</p>
第2次	2・3・4・5・6	<p>○ 事実と感想、意見を伝える。</p> <p>○ 100年をテーマにした発表をする。</p>  <p>○ 100年をテーマにした発表をする。</p> <p>○ 100年をテーマにした発表をする。</p> <p>○ 100年をテーマにした発表をする。</p>	<p>③ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>④ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑤ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑥ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑦ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑧ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑨ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑩ 沖縄の文化について調べる。</p>	<p>③ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>④ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑤ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑥ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑦ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑧ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑨ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑩ 沖縄の文化について調べる。</p>	<p>【知①】沖縄の文化に興味を持ち、発言できること（目指す姿①）</p> <p>【思①】沖縄の文化について調べる。</p> <p>【思②】沖縄の文化について調べる。</p> <p>【態①】沖縄の文化について調べる。</p> <p>【態②】沖縄の文化について調べる。</p> <p>【態③】沖縄の文化について調べる。</p>
第3次	7	<p>○ 文と感想、意見を伝える。</p> <p>○ 100年をテーマにした発表をする。</p> 	<p>⑪ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑫ 沖縄の文化について調べる。</p>	<p>⑪ 沖縄の文化について調べる。</p> <p>⑫ 沖縄の文化について調べる。</p>	<p>【知②】沖縄の文化に興味を持ち、発言できること（目指す姿①）</p> <p>【思②】沖縄の文化について調べる。</p> <p>【態①】沖縄の文化について調べる。</p> <p>【態②】沖縄の文化について調べる。</p>

5 本時の指導（6/7時間）

(1) 目標

話の内容が伝わるように事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考え、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができる。

(2) 授業仮説

タブレットを使い動画を撮り、その動画をお互いに見合う活動において、意見や感想を共有し助言し合えば、自分の考えが伝わるように事実と感想、意見とを区別し、表現を工夫することができるであろう。

(3) 展開 (第6時)

	学習活動	教師の働きかけ (□) 予想される児童の反応 (◆)	評価規準 【評価項目】(評価方法)
導入 (5分)	1 本時の学習課題を捉える。	□前時までの振り返りをする。 □教科書の例を見て、話し方の面で気をつけることを出し合わせる。 ◆事実と感想、意見が文末表現で言い分けられています。	
めあて 動画を友達と見合いアドバイスし合い、よりよいプレゼンテーションにしよう			
展開 (30分)	2 説得力のある提案になっているか文章構成を見直す。 [タブレット使用]	□タブレット上の文章構成メモを見返し、提案の説得力が増す文章構成、資料になっているか考えさせる。	  <b>【思判表】①②</b> (おおむね満足) 「100年後も伝えたい沖縄の言葉」を提案するために事実と感想、意見が区別され、適切な資料が使われ、伝わりやすい文章構成になっている。 (タブレット・ノート)
	3 プレゼンテーションの練習をする。 (1) ペアで練習する。 [タブレット使用] (2) グループで練習し、助言し合う。 [タブレット使用]	□文章構成メモを見返し伝わりやすい文章か考える。 □事実と感想、意見に分けられているか気を付けながら練習し、資料を提示するタイミングや示す時間も検討できるようにする。 □グループ学習を取り入れ、お互いにプレゼンテーションをしている様子を動画に撮り、動画を基に的確に助言し合えるようにする。 ◆事実と感想、意見に分かれているか。資料を提示するタイミング。時間を意識しているかアドバイスする。 □説得力を増す、プレゼンテーションになっているか、よりよい言葉は何か、言葉にこだわり、助言できるようにさせる。 □グループで練習し、助言し合ったことを受けて、事実と感想、意見を区別して、よりよいプレゼンテーションを再構成させる。 [努力を要する児童生徒への働きかけ] □助言してもらったことをタブレットに記述させる。 □何度も動画を再生して見返すようにさせる。 □再構成する場面では、ペアで考えさせる。	
	 お互いに動画を撮り、話すときのポイントを確認する。	撮り合った動画を見合い、再構成する。	
	4 プレゼンテーションを再構成する。 [タブレット使用]		
終末 (10分)	5 まとめ		
まとめ 友達とアドバイスし合うことで、よりよいプレゼンテーションにすることができた			
	6 振り返り	□構成メモを作ったり、資料を選択したり、再構成する中で工夫したことをまとめさせる。	

IV 仮説の検証

本研究の仮説に基づき「相手意識・目的意識を持たせる授業の工夫」「ICTの効果的な活用」の取り組みが、ことばを磨き伝え合う力の育成に有効であったかを、検証授業のノートや振り返り、タブレットの記録、行動観察、アンケートなどを基に検証を行う。

1 相手意識・目的意識を持たせる授業の工夫

本研究の「ことばを磨き伝え合う」ことを意識した授業改善では、「相手意識・目的意識」を明確にするために、「話すこと・聞くこと」の領域において、日常生活の中から話題を決め、誰に対して(相手意識)、何のために(目的意識)、話したり聞いたりするのか考えることを大切に、

研究を進めてきた。

「相手意識・目的意識」を明確にするために、「話すこと・聞くこと」の領域において、「100年後も伝えたい沖縄の言葉をプレゼンテーションしよう」を単元のゴールとし、誰に自分の考えや思いを伝えたいかと児童同士で話し合わせた。すると児童らは、これまで沖縄の言葉を受け継いできた地域の方々を伝える相手と設定した。その結果、児童はより相手に伝えたい、分かってほしいという相手意識を強く持った。

導入時にはゲストティーチャーを招聘し、沖縄の言葉についての現状と想いを話していただき、子供たちに沖縄の言葉の現状と課題について気づかせた。そして、自分事として捉えさせ、目的意識を持たせた。

第2時では、図4のように沖縄の言葉についてのイメージマップを個人で作成させ、その後、学級全体で共有した。共有することにより、児童は、沖縄の言葉のよさや課題に気づき、「100年後も伝えたい沖縄の言葉」は何か、自分の考えは何かと思考することができ、課題を解決し、提案するための方法や情報集めの仕方を考え、目的を明確にすることができた。

次に、聞いている相手に分かりやすく伝えるための方法を話し合わせ、教師の自作のモデル文やデジタル教科書の参考動画を見せ、プレゼンテーションのイメージをつかませる授業展開を行った。

図5は、実際に地域のお年寄りを招き、相手意識を持ちながらプレゼンをした様子である。前時の練習を生かし、聞き手を意識し、声の大きさや速さを変えたり、資料を聞き手に向けて見えやすいようにしたりしていた。また、文末表現をそろえたり、敬体で話したり、自分の伝えたいことを強調するなど、聞いている人に伝わりやすいように工夫していた(表2)。ほとんどの児童が、「100年後も伝えたい沖縄の言葉をプレゼンテーションしよう」という目的を持ってプレゼンテーションをする様子が見られた。

## 2 ICTの効果的な活用

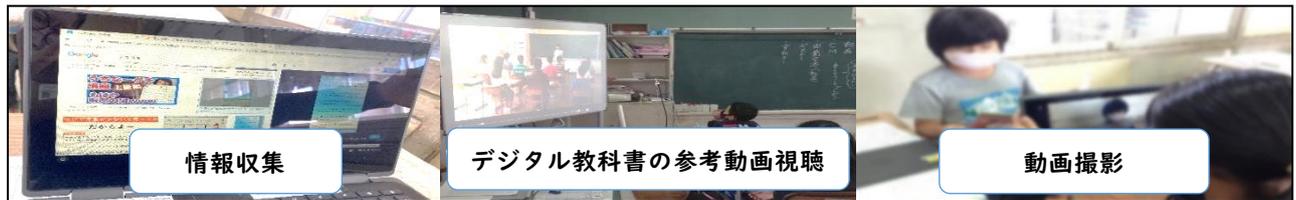


図6 ICTを活用した場面

図6のように、単元の中にICTを効果的に活用できる時間・場を設定した。情報を収集する場面、言葉を蓄積する場面、発表原稿を書く際の構想メモを作成する場面、動画を撮影して自分のプレゼンテーションの様子を振り返る場面、「100年後も伝えたい沖縄の言葉」をプレゼンテーションする場面など、ICTのよさを生かす授業展開を行った。「話すこと・聞くこと」の領域で音声言語はその場で消えてしまうので、自分の話したことを振り返る活動が難しいとされていた。しかし、動画を撮影することによって、自分の話している姿を客観的に見られるようになった。児童の授業の振り返りの中にも「今日、自分の原稿を見返したり、動画を見て、途中で止まったり、声が小さいところがあったから、聞いている人が分かりやすいように直していきたいです。」とあり、自分の話している姿を客観的に見て、振り返ることができた。児童の振り返りの記述から、自分の課題を見つけ、改善点を考えている児童が72.2%いることが分かり、間のとり方やこ

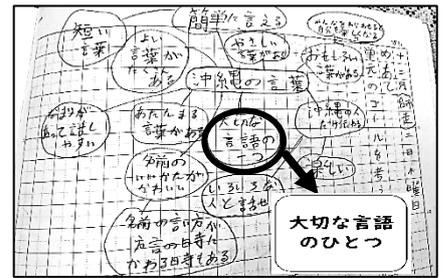


図4 沖縄の言葉のイメージマップ



図5 プレゼンの様子

表2 聞き手を意識した児童の振り返り

<ul style="list-style-type: none"> <li>いつもより大きい声で発表できた。でも、声の強弱が意識できなかったので、次は意識したい。</li> <li>声大きく、ゆっくりしゃべって伝えられたのでよかったです。そして、自分の伝えたい言葉を強調して伝えられました。</li> <li>今日プレゼンをして、声は大きくできたし、点があるところはちゃんと止めて、聞こえやすくてよかったと思います。</li> </ul>
--

とばのリズムに気を付けないといけないことを本人や児童同士で見つけることができた。また、児童の振り返りの記述の中に、改善点のみを書いている児童も、授業の様子から、動画を見て自分の課題を見つけることはできていたと捉える（表3）。

ICTを活用することは、「話すこと・聞くこと」の領域において、これまでは難しいとされてきた、音声言語の振り返りが容易にでき、評価に生かすことにも効果的であった。

### 3 ことばを磨く子供たちの姿

本研究では、ことばを磨く子供たちの姿を表1として捉え、児童がことばを磨いていくことができたのかを検証していく。表4は、ことばを磨く子供たちの姿をそれぞれ分析した結果を示している。以下は、ことばを磨く子供たちの姿である。

#### (1) ことばを楽しみながら使って増やそうとする姿

表4の①においては、第7時の振り返りから、「ことばは使っていかなければなくなってしまふから使わなくてはいけない」と考えた児童が93.7%いた。また、たくさんのことばに触れる活動の1つとして、「ことば集め」の活動を取り入れ、沖縄の言葉（うちなーぐち）を集め、意味を調べさせた。ただ集めるだけの児童がほとんどだったが、自分でグループ分けをして、ことば集めを楽しんでいる児童も見られた。ことばは人と人の心をつなげる大切なもの、人の心を動かすものと改めて意識させるように、語彙学習を取り入れた（図7）。

しかし、ことば集めの活動において、語句は増やしたが、文章を作成していく過程やプレゼンテーションをする場において、集めた語句を活用するまでには至らず、今後は増やした語句を活用する活動を充実させる必要があると考える。

#### (2) ことばを選び相手に伝わりやすい表現をしようとする姿

表4の②は文章の構成メモに書く時のポイントが入っているか（始め・中・終わり、事実・意見・感想など）を分析した。発表原稿の中に、相手に分かりやすく内容を伝えるため、自分の考えていることを明確にし、どのようなことばを用いているか、文章のつながりをどのように表現しているかを見取った。また、プレゼンテーションをするための文章を作成する過程で、図8のように、教科書巻末の「言葉のたからばこ」を使用し、聞いている人に分かりやすいことばにするには、どのことばが適切なのか探したり選んだりする児童がいた。選んだことばが適切なのか、隣の児童と確認する様子もあり、相手に伝わりやすくするための工夫も見られた。

#### (3) 自分の考えに適切なことばを問い直す姿

発表原稿を推敲する時間では、自分の原稿を見返し、言い換えることばや言い回しを朱書きで添削させた。図9は、「残したいです。」ということばを「残していきたいです。」と言い換えた児童のノートである。その理由を尋ねると、「していきたいにすると、自分で行動に移していきたいという気持ちを強く表現できると思ったから。」と答えており、この児童は、表1のことばを磨く児童の目指す姿③を達成できたと捉える。個人の推敲を終えると、ペアやグループでの添削も行い、聞き手の立場になって、分かりやすいか考えさせた。聞き手の立場になる視点を示し、推敲させた。聞く時の視点を与えることで、お互いに言葉や文章の構成に着目して、推敲する活動へとつなげることができた（図10）。

表3 ICTを活用した振り返り(n=18)

課題・改善点	72.2%
改善点のみ	27.8%

表4 ことばを磨く児童の姿

①身に付けたことばを楽しみながら使って増やそうとする姿。	93.7% (n=16)
②相手に伝わりやすい表現をしようとする姿	86.3% (n=19)
③自分の考えに適切なことばを問い直す姿	58.8% (n=17)



図7 jamboardに張り付けたことば

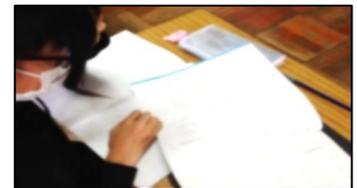


図8 適切な言葉を選ぶ児童

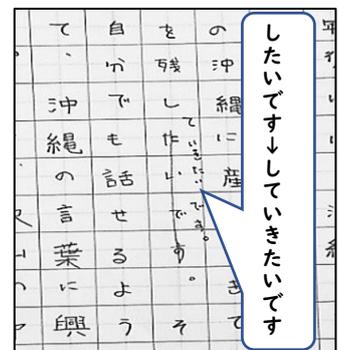


図9 発表原稿の推敲（個人）

しかし、訂正後の発表原稿からは、表4の③のように6割近くの児童がよりよいことばへの言い換えや書き加えはあったものの、残り4割の児童は、初めに書いた文章のままでよいと判断していた。今後は、推敲の時間を十分に与え、よりよいことばを考え、選択する活動の充実を図る必要がある。

次に、ことばを意識した授業の第1時、第3時、第7時の振り返りの記述を検証した(表5)。「ことばを意識した」に関して記述した児童が、第1時の63%から第3時100%、第7時81.2%と第1時よりも増えていることが分かる。第1時の児童の振り返りには、「方言は世界遺産くらい大切にしたい」「7000以上ある言語が20、30年で2500も消えると聞いて、方言を守らないといけないと思った」などと記述されており、言語の大切さに気付いていた。第3時は自分の伝えたい沖縄の言葉を考える学習活動だったため、全員が伝えたい沖縄の言葉を意識して振り返りを書くことができていた。第7時は、単元最終時であり、たくさんの沖縄の言葉の中から一番伝えたい言葉を選択し、これからも自分たちが使いながら伝えていかなければならないと、ことばのよさや大切さに気付いた記述が多かった。このように、教師がことばを磨くことを意識した授業展開や声かけを行うことで、児童は、振り返りの中にことばを意識した内容を書くことができたと考える。

また、検証授業の前後でとったアンケート結果から、「自分の考えを分かりやすく伝えるために言葉を選びますか。」の項目では、検証前は、「はい・どちらかといえばはい」と答えた児童の割合が88.9%だったのに対し、検証後は100%の児童が、「はい・どちらかといえばはい」と答え、自分の考えを伝えるためには、相手に伝わって欲しいという思いから、相手分かることばを選ばなければ伝わらないと気づき、ことばの大切さを十分に感じていると考察できる。

#### 4 伝え合う力

本研究における「伝え合う力」とは、自分の考えを伝えるだけでなく、相手の考えを受け止めて理解し、意見や感想を述べたりするなどの言語活動を通して培われていく能力であると捉え、また、相手に伝えたい、相手に分かってもらいたい、知りたいという相手意識や目的意識を明確にすることで、伝え合う力が育まれると考え、研究を進めてきた。

単元のゴールを「100年後も伝えたい沖縄の言葉をプレゼンテーションしよう」とし、伝える相手を地域のお年寄りの方々と設定したことによって、相手意識・目的意識が明確になった。そして子供たちは、自分たちで伝えていかなければ、沖縄の言葉がなくなってしまうかもしれないと課題をもち、自分事と捉えることができた。身近な人達に自分たちの考えを伝えることができるという思いが、単元を貫く学習活動を継続させた。

児童は、「100年後も伝えたい沖縄の言葉」をどのように伝えると効果的なのか、グループで話し合う場面において、伝える相手を意識しながら、話し合うことができた。児童の発言の中から、「お年寄りに伝えるためには、繰り返し見ることでできるビデオはどうだろう。そうすると、音量の調節もできるよ。」「家の中にお年寄りの方にも聞いてもらえるように、宣伝カーもいいんじゃない。」「でも、宣伝カーだとことばが流れてしまうよね。」「そっか、その場合は止まって流せばいいんじゃない。」など、話し合いをする中で、お互いの意見を尊重しながらも自分の考えを伝えたり、感想や意見を述べたりする姿が見られた。

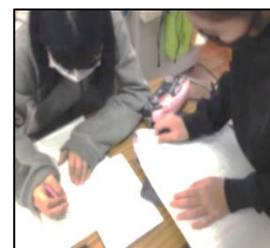


図10 発表原稿の推敲(ペア)

表5 振り返りの検証

	第1時 (n=19)	第3時 (n=17)	第7時 (n=16)
学習活動の感想に関する記述	100%	76.4%	87.5%
ことばを意識した記述	63%	100%	81.2%
次時への目標	21%	64.7%	



図11 「100年後も伝えたい沖縄の言葉」のプレゼンの様子

図 11 は、単元の最終時の言語活動の様子である。ゲストとして、地域のお年寄りの方々に来ていただき、グループごとにプレゼンテーションを行った。子供たちは、「まくとうそーけーなんくるないさ」「命どう宝」「にふえーで一びる」などの言葉を選びプレゼンテーションをしていた。例えば、伝えたい言葉を「まくとうそーけーなんくるないさ」と選んだ児童は、「よく知られている『なんくるないさ』という言葉よりも、『まくとうそーけーなんくるないさ』は『挫けず、正しい道に歩む努力をすればいつかはいい日がある』という意味を持つから、言われたら嬉しい」と理由を述べていた。「なんくるないさ」という言葉は知っていたものの、「まくとうそーけーなんくるないさ」という新しい言葉を知り、その言葉の意味のほうが自分の考えに適切だと気づき、ことばを選び、ことばに対する意識を高めていたと考える。また、「命どう宝」と選んだ児童は、「沖縄戦で多くの方が命を落とすという悲しい歴史を持っているので、命が何よりも尊いことを知っているからこそ、重みを持ったことばとして心に響くと思う」とことばそのものの意味だけではなく、言葉の背景にある思いなども受け取り、自分の考えを伝えることができた（表 6）。

表 6 児童の伝えたい言葉

伝えたい言葉	伝えたい理由
まくとうそーけーなんくるないさ	言葉の意味を知って、言われて嬉しくなった
命どう宝	戦争を体験した人の思いも重なる
にふえーで一びる	独特な感じ・特別な感じ

また、子供たちは、自分たちの考えや思いを伝えるだけではなく、ゲストの方々の思いも聞くことができた。児童の振り返りの中に、「〇〇さんが、みんなの発表を聞いて、家族や孫にも方言で話そうと思ったと言っていたので、うれしいなと思いました。私も家族だけではなく、いろいろな人にひろめようと思いました。」と記述した児童がいた。ゲストとのやり取りを通して、児童はもちろんのこと、ゲストの方々自身も、改めて沖縄の言葉のよさに気づいた様子がみられ、双方向の言語活動を行うことで、伝え合うことのよさを実感していたと考える。

児童の振り返りの記述に、「自分が伝えたい言葉を強調して伝えられたのでよかったです。これからは沖縄の言葉を守るため、共通語も使いながらつかっていきたいです。」「今日の勉強で、読むときは、声の強弱や読む速さなどに気を付けないといけないことが改めて分かりました。」とあり、相手意識を持った話し方に気を付けていたことが振り返りから見取ることができる。

次に、図 12 のアンケートでは、検証前は肯定的に答えた児童の割合が 77.8% だったのに対し、検証後は 90% となった。なぜそのように思うかという理由として、「いろいろ工夫して話している。」「ことばを選んでいる。」「できるだけ理由をくわしく書いている。」など、ことばの大切さに気づき、聞き手を意識して自分の考えを伝えたいという思いが高まったと捉えることができる。このことから、伝え合う力を育ませるためには、相手に伝えたい、相手に分かってもらいたい、知りたいという、相手意識や目的意識を明確にすることが効果的であったと考える。

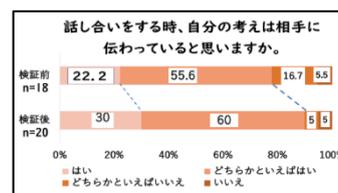


図 12 伝え合う力の変容を見取るアンケート

## V 成果と課題

### 1 成果

- (1) 相手意識・目的意識を持たせる工夫をしたことで、児童は話す目的や相手を具体的に意識でき、自分の考えを相手に伝える必要性を感じ、分かりやすく伝える工夫をすることができた。
- (2) ICTの動画撮影機能を活用し、プレゼンテーションする様子を撮影することによって、客観的に振り返ることができ、よりよい伝え方の改善へとつなげることができた。
- (3) 言葉を磨くためには、日常的に言葉を意識し、使っていくことが大切だと気づき、相手に分かりやすく伝えるためには、その時の思いや考えに適切な言葉を選び、表現しようとしていた。

### 2 課題

- (1) 発表原稿の見直しやプレゼンテーションのための練習時間が十分に取れなかったため、伝え合う力を高めるための指導計画の見直しが必要である。
- (2) 児童の語彙力を高めるために、今後とも語彙の量だけでなく、質を高めていくための活動をさらに考える必要がある。

## 〈参考文献〉

- 石井英真・鈴木秀幸編著 2021 『ヤマ場をおさえる学習評価 小学校』 図書文化社
- 茅野政徳編著 2021 『指導と評価を一体化する小学校国語 実践事例集』 東洋館出版社
- 樋口万太郎 2021 『G I G A スクール構想で変える！1人1台の端末時代の授業づくり』 明治図書
- 国語教育実践理論研究会編著 2020 『「ことばを磨き考え合う」授業づくり』 明治図書
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2020 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』  
東洋館出版社
- 鈴木一史編著 2019 『国語教師のための語彙指導入門』 明治図書
- 野中潤 2019 『学びの質を高める！ICTで変える国語授業—基礎スキル&活用ガイドブック』 明治図書
- 細川太輔・鈴木秀樹 2019 『楽しみながら力を付ける！国語授業のICT簡単面白活用術50』 明治図書
- 田近洵一・井上尚美・中村和弘編著 2018 『国語教育指導用語辞典』 教育出版
- 水戸部修治 2018 『小学校 新学習指導要領 国語の授業づくり』 明治図書
- 文部科学省 2018 『小学校指導要領平成29年告示解説国語編』 東洋館出版社
- 今村久二・中村和弘企画編集・執筆 2017 『語彙—言葉を広げる—』 東洋館出版社
- 植山俊宏・山元悦子編著 2017 『話す・聞く—伝え合うコミュニケーションカー—』 東洋館出版社
- 藤森裕治・宮島卓朗・八木雄一郎編著 2015 『交流—広げる・深める・高める—』 東洋館出版社

## 〈参考 web サイト〉

- 沖縄県教育委員会 2021 『沖縄県学力向上推進 5か年プラン・プロジェクトII 令和3年度版』  
[https://www.pref.okinawa.jp/edu/gimu/jujitsu/shisaku/documents/r03\\_pp2.pdf](https://www.pref.okinawa.jp/edu/gimu/jujitsu/shisaku/documents/r03_pp2.pdf) (最終閲覧 2022年2月)
- 中央教育審議 2016 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要及び方策等について(答申)』  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (最終閲覧 2022年2月)
- 文部科学省 2016 『言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ』  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/__icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf) (最終閲覧 2022年2月)